

アトモスフィア

危機感

大塚 栄子

北海道大学名誉教授, 北海道工業技術研究所主任研究官

危機感は人よっての持ち方が違う。人間にとっての危機感とは生命とか人間の尊厳が脅かされることに對して抱かれると思う。それに気がつくかつかないかによって、持ち方が変わってくる。日本人はあまり危機感を持たないといわれている。目の前に現れないと気がつかないようでは厳しい条件の時には生き延びられない。日本人は厳しい条件に曝されたことが少ないので、気がつくのが遅いのではないかと思う。

わが国の生物関連の研究や教育について、先を見た何か施策が必要と思う。文部省の学術審議会でも危機感を持つ必要がないという人もいるが、近い将来のことを考えても農業、医療という人間の生命に関わる分野に生物学の研究が及ぼす影響が計りしれないほどある。

去る4月17日にバイオサイエンス・サミットと称して、いくつかの団体が共催する会が東京で開かれた。新聞などでも伝えられているが、政・産・学・官が参加するという今までにない集まりであったが、とくに5省庁が一堂に会したという意味は非常に大きいと思う。大学のインフラ整備について、日本の学者は外国から批判されていたが、仕組みを変えなければ難しいことが多いという。学者は政治には無力であるが、継続的に主張して行くことで声が届き始めているようでもある。生物関連の研究の重要性がこのような形で取り上げられたことは喜ばしいことである。研究をサポートしている省庁がなんらかの連携を持てば今までにない効果を生む可能性がある。仕組みを解明しようという先見性のある働きかけをした人々に敬意を表したいと思う。

今なぜバイオなのかというと、最近よくいわれているように、ヒトの生命の設計図である遺伝子の塩基配列が明らかになりつつあるからである。1次構造の重要性は Sanger が1976年にDNA フェージ、ファイエックス174の5375からなる塩基配列を決定したときに、一つの遺伝子に、3種類のタンパク質が位相をずらしてコードされているという発見があったこと一つを思い起こすだけでも明らかである。より複雑な高等生物の設計図が見えてくると、もっと大きな発見があると期待できる。事実、解析技術が進歩して、一つずつ解析していたものを1万個とか10万個の単位で解析するというようなことになると、単に量の問題ではなく、質の変化として認識しなければならない。今、バイオテクノロジーの分野ではこのような変化が世界的には起きている。これが10年とか100年後におよぼす影響を推定することが重要である。進み方の速度を考えると5年先を予測しなければならないかもしれない。

「急がば回れ」ということもあるので、研究者を育てる教育を真剣に考えることが急務であるように思われる。大学の果たす役割が非常に大きい。